

スギ・ヒノキ暗色枝枯病の被害回避法						
<p>[要約]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暗色枝枯病の発生は、<u>水ストレス</u>(干ばつ)および<u>表層地質</u>との相関が高い。 ・枝打ちや間伐作業との相関はない。 ・被害回避法として水ストレスのかかりやすいところのスギ植栽は避ける。 						
長崎総農林試・林業部・育林科	専門	林業	対象	森林保護	分類	指導

[背景・ねらい]

本病の発生は気象被害（特に干ばつ）との関係が注目されており、本県でも被害の発生がみられるがその実態は分かっていない。

このため被害発生の実態、主な発生要因、被害回避・軽減法を検討する。

[成果の内容・特徴]

被害は枝および不定芽から発生し、枝の基部から樹幹部に達する。病患部は形成層に壊死部ができることによって形成される。この壊死部は木の成長に伴って紡錘形状の溝となり、病患部から髓方向に本被害に特徴的な黒褐色の変色部分が形成される。

樹種別に被害程度の差をみると、ヒノキよりスギの方が被害本数率が高い。また、ヒノキでは漏脂病の被害発生林において発生している場合が多い。

被害は表層地質で異なり、県北の玄武岩地帯、対馬の頁岩地帯では被害本数率が高く、島原の火山砕屑岩地帯や県央の安山岩地帯では低い傾向がみられた。

沿岸部においては恒常的な発生がみられた。

病患部の発生が、記録的な干害の年と一致していて、水ストレスとの相関が裏づけられた。（図1，2）

：諫早1号は他の品種に較べて感受性がある。）（図3）

枝打ちおよび間伐と被害発生との関係はみられない。

[成果の活用面・留意点]

施業による被害回避の可能性は低いので、今後、育種的手法により抵抗性母樹を探索していく必要がある。

[具体的デ - タ]

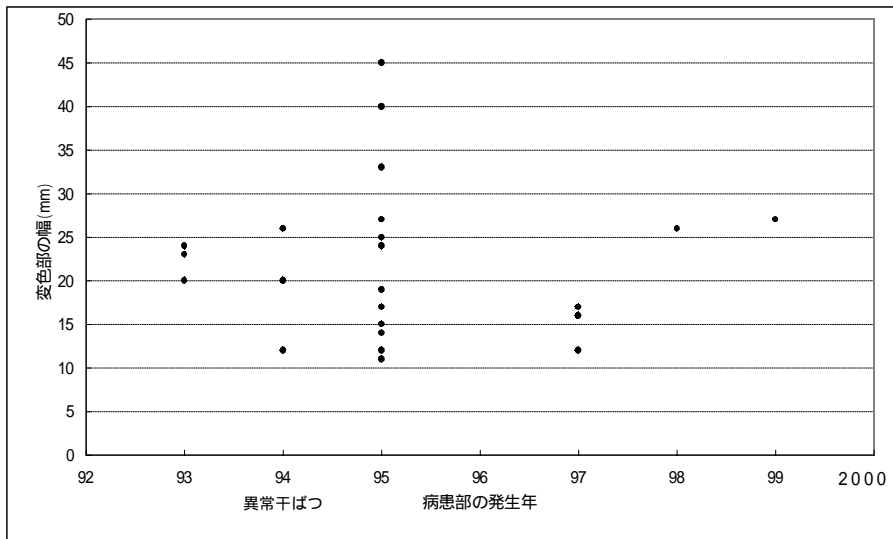


図 1 病患部の発生年と変色部の幅の関係

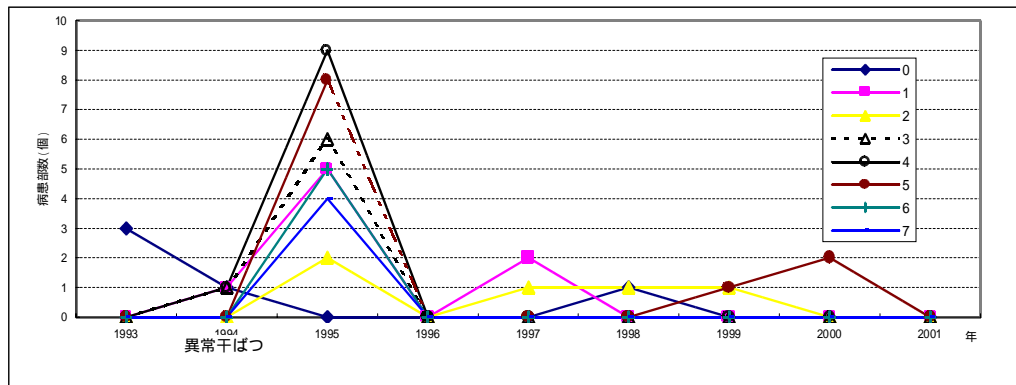


図 2 供試木にみられた病患部数の経年変化

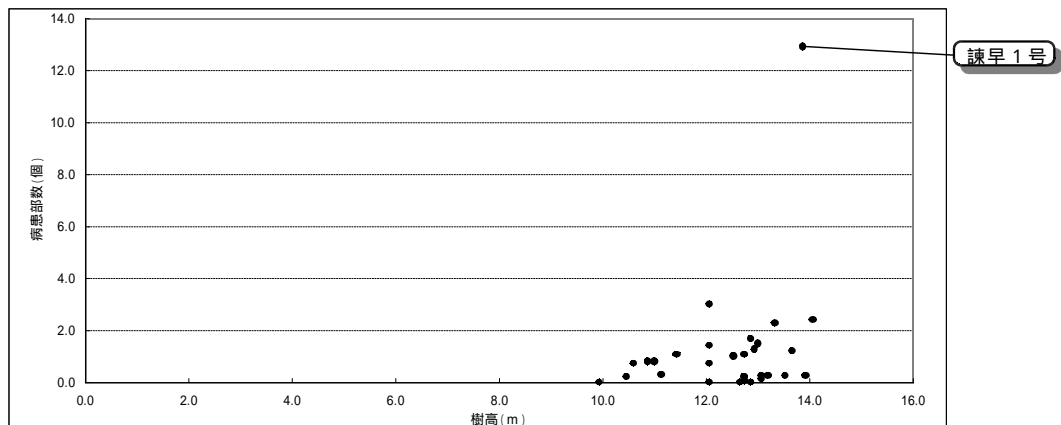


図3 樹高と病患部数の関係 (諫早次代検定林)

[その他]

研究課題名 : スギ・ヒノキの暗色枝枯病の被害実態と被害回避法の確立
 予算区分 : 国庫(1/2)情報システム化
 研究期間 : 平成10年～12年
 研究担当者 : 久林高市